

『十一月の日 (11/04)』

十一月は雨で始まりました
冷たい雨がシトシトと
路地を木の葉をぬらしています
朝日の明るさ濡らしています
冬はどうして淋しいのでしょうか
外の寒さと
家族の温もりが
一段と冬を染めるからでしょうかね

北の雨がしとしとと
樹木の葉を赤に塗り変えるごとく
降りそそいでいます
でも都会の街は
人生を謳歌し飾り窓は
才能を鋭角かかせて競って
覇を争っている
でも田舎の道の風景の方が
私は好きです
垣根が有って鬱蒼とした空き地が有って
水溜まりが有って
冷たさで震えながら歩くのが
私には好きなのです

十一月は雨で始まりました
次の日も次の日も
雨がしとしと降って
大地を冬へと誘っています
三日目に太陽の光が射し
どの葉もみるみる真っ赤にと
染まりました

『十一月の雨 (11/50)』

すべてを寂しさ中へと
染め変えようとするのか
十一月の雨よ
真っ赤に色変わりした木の葉を
さらに燃やして散らすつもりか
十一月の雨よ

今日もしとしとと
沈んだ霧雨が
大地へ北の水を細かく
降り舞っている

北の水遠い遠い
海の彼方の思い出を
大地に住まう生き物へ
微睡ませるように
細かく舞っている

冷たさに身を震わせて
淋しさに人恋しさを募らせて
十一月の雨は
大地に絨毯を敷こうと
色とりどりの
落ち葉を敷き詰めるのです

『風 (11/90)』

北風が大地を
吹きさらしている
生き有る物の
想いも
木の葉のごとく
宙に弄ばれ
飛び散らされてしまう

大樹が軋み
小枝が折れ
風は狂って
大地の上を
通りすぎる

希望が心の中を
吹きさらっていく
夢に生きる物の
祈りも
木の葉のごとく
宙に弄ばれ
飛び散らされてしまう

『駅舎 (11/11)』

最終電車が去って
闇に寝た構内を
白い猫が
一匹横切っていく
気配は眠らないで
じっと影を映し
電球が無人の闇に
人の匂いを香している

昼間人間が一人
ホームから飛び込みました
即死でした
小さな駅ですけど
人の渦が出来
時間と共に引いていきました
いつの間にか
人の口にもものらしく
夕刻には
無言の人々が忙しく
駅舎を往来し
いつもの佇まいに
戻りました
彼が何処に住んでいたかも
彼がどんな人かも
彼がなぜ死を選んだかも
闇に閉ざされました
いやーあの電球だけは
知っているかも
いえ人間をですよ
白い猫は垣根を潜って
鬱蒼とした空き地へと
消えて行きました

『空 (11/17)』

そらはいつも
何を見ているのでしょうか
白雲や黒雲を浮かべて
地球の何を
見ているのでしょうか
いや空は
夢を見るのでしょうか
曇り空の上で
陽を浴びながら
どんな夢を
見ているのでしょうか

人は花火のように
希望を夢に見る
咲いても一瞬なのに
儂さでも一生をかける
生きるってつらいのです
人はそれでも生きる
夢を求めて
希望を抱いて
人は空の下で
一瞬の喜びに
大地の上に生きる

そらはいつも
何を見ているのでしょうか
生きる喜びや
生きる悲しさをでしょうか
生きる淋しさをでしょうか
花が咲いて
花が散って
風が吹いて
雨が降って
空はいつたい
何を見ているのでしょうか

『机』
『II/I/17』

卓上に両腕をつけて
時の過ぎるのも
私は忘れていたらしい
人々がいなくなるのも
ふとガラス窓が
私を映しているのに
我を戻しました
白髪が増えました
いつの間が増えたのか
髪を黒く染めるのか

人の海に生きるには
心淋しくなりました
明日がまるでないようで
迷路に入った迷子の様に
大人ですの
涙を落としても
泣くことは出来ません
闇の向こうから
赤ん坊の泣き声だけが
みように響いているのです

End all 1996/11

『心 (12/07)』

泣けてくるのです
なにかにも
泣けてくるのです
なにかにも

たった一度でいい
想いの世界へ行けたら
たった一度でいい
郷愁の世界へ行けたら
冬にはいつも
心の世界を訪れてくる
冬にはいつも
せつせつと雪が降る

なにかにも
泣けてくるのです
なにかにも
泣けてくるのです

『絆 (12/21)』

家族と言う絆
母親がいて
父親がいて
子供がいて
家族と言う絆

家族と言う絆
母親は心配し
父親は悩み
子供は育っていく
家族と言う絆

家族と言う絆
子供は大人になり
家族を持ち
子供を持ち
家族と言う絆

家族と言う絆
雨ばかりでなく
朝陽が射す日も来る

喜びも悲しみも
家族と言う絆

家族と言う絆
喜びも悲しみも
家族と言う絆
雨の日も晴れの日も
家族と言う絆

『星空 (12/21)』

オリオン座が
無言で輝き
北斗七星が
静かに煌いている

人間の小さきが
心に染み渡り
太古の昔から
人はそうであったのか

星は静かに輝き
人の心を慰める
人の心を清める
無言の煌きで

『変化 (12/21)』

阪神大震災から
日本の社会意識がはっきりと
変わり始めました
オウム教のサリン事件から
日本の社会は変化した

心を取り戻すのではなく
失った心のまま未来へ走り出した
もっとも安易な方法を
人は選択したのでしょうか
組織が生きるために
個人の痛みは無視を選択した
誰もが個人になりたくないため
組織へと忠誠を誓い始めている
会社を維持するため
国を維持するため
この社会は鬼になりつつある

あの二つの出来事から
この国の社会は答えを出しつつある
天皇を頂点としたこの国家へ
何時になったら
階層階が回転駒は止まるのだろうか？

『椿 (12/21)』

雪が降る雪が降る
悲しみが訪れ
椿の花が真っ赤に咲いた

人の生きは悲しみか
人の生きは孤独なのか
人の生きは寂しさか

雪が降る雪が降る
孤独が音も無く訪れ
椿の花が真っ白に咲いた

人の生きは孤独か
人の生きは寂しさなのか

人の生きは悲しみ

雪が降る雪が降る
寂しさがきらきら光り落ち
椿の花弁が舞っている

人の生きは寂しき
人の生きは悲しみなのか
人の生きは孤独

雪が降る雪が降る
悲しみも孤独も寂しさも
椿の花びらが舞っている

End all 1996/12